

角膜移植開始50周年 献眼推進特別活動 実施報告

1、趣旨

わが国における角膜移植開始50周年（2007年）及び角膜移植に関する法律制定50周年（2008年）を機会に、当協会においては、全国の関係者の力を集めて、社会の各方面に呼びかけ、献眼及びアイバンク事業への理解をさらに深めるとともに、わが国内の献眼数の大幅な増加を求めることに致しました。ここにおいて、2007年度から2009年度まで3年間の特別事業をもって、空しく光を得られずに苦しんでいる角膜移植待機患者の数を大幅に減少させることを目指しました。

2、特別活動の実施体制等

(1) 実施主体等

主催	財団法人 日本アイバンク協会。
共催	各アイバンク（54）。
助成	日本財団
協力	日本医師会、日本眼科学会、日本眼科医会。 日本臓器移植ネットワーク。 ライオンズクラブ。
後援	厚生労働省、 文部科学省、 日本失明予防協会。

(2) 実施期間 平成19年（2007年）4月1日（日）から
平成22年（2010年）3月31日（水）まで

(3) 事業実施の目標

- ① 献眼者及びアイバンク事業に対する協力者の拡大
- ② 国民一般への知識普及の強化、献眼協力意識の養成

(参考) 新規特別活動の目標値について

当協会としては、平成2006年度当初の推定の角膜移植待機患者約5,000人を2010年度末に約2,500人に半減させ、以後、2012年度までにフォローアップのキャンペーンを行い、待機患者数を原則ゼロに近づけることを目標（2013年度）としてこの活動を推進することとした。

(4) 事業実施の経費

当協会の2007年度～2009年度予算において、特別事業実施のために必要な経費を計上しまし

た。なお、各年度、この財源の一部として、日本財団の助成を頂きました。また、各方面からの募金活動、その他のご協力を頂きました。

(参考) 各年度 特別活動関係予算

平成19年度	献眼推進特別活動	4,562,000 円
同 20年度	献眼推進特別活動	5,143,000 円
	雑誌等広報費	2,000,000 円
同 21年度	献眼推進特別活動	5,916,000 円
	公共広告機構 (A C) 負担金	14,611,000 円

3、特別活動の実施状況

(1) 活動の主な経過

平成18年9月6日 日本アイバンク協会・常務理事会において、角膜移植開始50周年記念新規特別事業案について決定

平成19年3月9日 日本アイバンク協会理事会において「角膜移植開始50周年 献眼推進特別活動 実施要綱」決定。同日の評議員会に報告し、了承された。

同 3月27日 各アイバンクへの周知。共催についての正式依頼。

(第1年度)

同 4月 1日 日本財団助成決定。(以降、3年間毎年度助成された。)

同 5月22日 厚生労働省後援名義使用許可

同 6月14日 文部科学省後援名義使用許可

この時期、関係各団体の協力、後援等逐次決定。

同 6月 8日 愛の献眼50周年・献眼推進特別活動 中央説明会(於・九段会館) 28団体に呼びかけ。(所理事長、小口、金井、池崎常務理事他)

同 6月 8日 常務理事会において本活動の愛称を「愛の献眼50周年・献眼推進特別活動」と決定。

同 6月14日 厚生労働省記者クラブで「愛の献眼50周年」について記者発表。
(澤 常務理事)

同 6月～8月 各団体を訪問して啓発活動の具体的協力依頼及び打ち合わせを行う。

同 7月28日 アイバンク全国連絡協議会で、愛の献眼50周年事業の実施について説明。

同 8月 1日 今泉亀撤先生、角膜移植の普及等の功績で第59回保健文化賞受賞決定。

同 8月 4日 愛の献眼50周年事業の実施上の留意事項について各アイバンクへ事務連絡。

同 10月26日 愛の献眼50周年特別活動説明会(茨城県)(小沢先生他)

同 11月 2日 愛の献眼50周年記念フォーラム(東京都 ハートイン乃木坂にて)
今泉 亀撤氏 保健文化賞受賞を祝う会(東京都 ハートイン乃木坂)

- 同 11月 3日 愛の献眼 50周年特別活動説明会（北海道）（澤 常務理事他）
 同 11月 16日 愛の献眼 50周年特別活動説明会（群馬県）（本間理加先生他）
 同 11月 28日 愛の献眼 50周年特別活動説明会（福岡県）（西田常務理事他）

平成 20 年 3 月 7 日 愛の献眼開始 50 周年・献眼推進標語 入選作 発表（5 点）
 最優秀作品「あなたにもできます光の贈りもの」

（ 第 2 年度 ）

- 同 4月 16日 日本眼科学会評議員会・愛の献眼 50 周年特別活動説明（所理事長）
 同 4月～7月 前年度協力して頂いた各団体に引き続き協力依頼する。
 この外、社会保険関係団体、日本宗教連盟加盟各宗教団体に働きかけ。
 同 9月 7日 日本眼科医会支部長会議・愛の献眼 50 周年特別活動説明（金井常務理事）
 同 10月 4日 愛の献眼 50 周年特別活動説明会（宮崎県 西田常務理事他）
 同 10月 4日 愛の献眼 50 周年特別活動説明会（福島県 澤 常務理事他）
 同 10月 22日 日本臨床眼科学会 愛の献眼 50 周年 説明（所 理事長）
 同 11月 29日 愛の献眼 50 周年特別活動説明会（大分県 澤 常務理事他）

同 10月～12月にかけて、大手週刊誌 4 誌、小学高学年向け雑誌 2 誌、学生新聞 2 誌
 に、献眼推進の啓発広報掲載。

平成 21 年 1 月 中高生対象のマンガ「同じ空を眺めて」（白黒版）を刊行。
 （その後、カラー版を 6 月に作成。）

平成 21 年 1 月 16 日 今泉賞（第 1 回）審査委員会
 小山ライオンズクラブ、岩手医大眼球銀行、眞鍋禮三氏、勸山 弘の 2 団体と 2 氏が受賞。

- 同 3月 6日 愛の献眼開始 50 周年・献眼推進標語 入選作発表（優秀作 1 点）
 同 3月 14日 愛の献眼 50 周年特別活動説明会（広島県 小口常務理事他）

（ 第 3 年度 ）

- 同 4月 15日 日本眼科学会評議員会 愛の献眼 50 周年説明（所理事長）
 同 4月 17日 日本眼科学会総会モーニングセミナー（金井、西田常務理事）
 同 4月～7月 前年度協力して頂いた各団体に引き続き協力依頼する。
 同 7月～1年間 AC（公共広告機構）を経て、TV、新聞等に献眼推進啓発広報。
 同 7月 24日 第 1 回今泉賞贈呈式（於・アイバンク全国連絡協議会にて）
 同 8月 6日 愛の献眼 50 周年特別活動説明会（千葉県 澤 常務理事）
 同 10月 3日 愛の献眼 50 周年特別活動説明会（福島県 金井常務理事）
 同 10月 8日 日本眼科学会評議員会 愛の献眼説明（所 理事長）
 同 10月 31日 愛の献眼 50 周年献眼推進フォーラム（東京都駒場エミナースにて）

平成 22 年 1 月 26 日 今泉賞（第 2 回）審査委員会

波佐見ライオンズクラブ、及び 林 文彦氏 が受賞。

同 3 月 8 日 献眼登録者及び家族に対するフォローアップ事業に日本財団助成決定

同 3 月 26 日 全国チーフサポーターセミナー・愛に献眼 50 周年説明（小口常務理事）

（2） 各公益団体のご協力

当協会及び 54 アイバンクは、財政的に極めて微力であり、全国的マスコミ等に有料でキャンペーンを展開する資力はないので、保健医療、福祉、社会保険、社会教育、宗教、等、献眼推進に関心を持っておられる全国的な公益団体に協力をお願いし、その組織を通じて献眼推進を図ることを、今回の特別活動の一つの大きな柱として力を入れたところです。

呼びかけは、上記の分野以外にも広く行いましたが、継続的に関心、協力を頂いたのは、次の諸団体でした。ここに記載して、心からの感謝の意を表すところであります。

- ① 日本眼科学会
- ② 日本眼科医会
- ③ 各地ライオンズクラブ
- ④ 日本医師会
- ⑤ 日本歯科医師会
- ⑥ 日本薬剤師会
- ⑦ 全日本病院協会
- ⑧ 日本看護協会
- ⑨ 全国社会保険協会連合会
- ⑨ 全国国民健康保険診療施設協議会
- ⑩ 日本障害者リハビリテーション協会
- ⑪ 全日本葬祭業協同組合連合会
- ⑫ 全日本冠婚葬祭互助協会
- ⑫ 日本宗教連盟
神社本庁
日本キリスト教連盟
教派神道連合会
全日本仏教会
- ⑬ 各大学の医学部眼科教室
- ⑭ 東京都（各小学校及び福祉保健局保健政策部疾病対策課）
- ⑮ 全国都道府県関係課、各保健所

（注） 各団体から頂いたご協力の詳細については、別紙 1 「愛の献眼五十周年献眼推進特別活動への諸団体等のご協力について」を参照して下さい。

（3） 啓発資料等

今回の活動期間中には、キャンペーン用に各種の啓発広報資料を作成し、各アイバンクや関係団体の使用に供した。その一覧は、別紙 2 のとおりです。

このほかにも、報道関係説明用の資料、各団体あての説明資料、集会イベントの広報資料等は、その時々条件に応じて種々作成しました。

4、特別活動の総括

(1) 今回の特別活動に際しては、日本財団からの助成を活用する等により、献眼推進のシンボルキャラクターである「アイちゃん」マークを強調した各種の献眼推進パンフレット、ポスター、クリアファイル、シール、さらに携帯電話ストラップ、中高生向けマンガ本、などを作成したが、好評でした。各アイバンクの行事などにも広く用いられました。

また、平成20年10月から12月にかけて、乏しい予算を工面して、大手週刊誌、小学生向け雑誌、小中学生向け新聞に献眼啓発広報を掲載しました。

この外、平成21年度から公共広告機構の支援団体に選定され、2年間にわたり、テレビ、新聞、ラジオ、雑誌に、献眼推進広報スポットが、出されることとなり、地域によって掲出頻度は異なるものの、かなりの反響を得つつあります。

(2) 各地での愛の献眼50周年献眼推進説明会は、アイバンクやライオンズクラブ等のご協力を得て開催されましたが、全国各ブロック全てには及びませんでした。アイバンクの組織体制の強弱による点もあるものと思われまます。東京で第1年目及び最終年に開催された中央集会は、厚生労働省、文部科学省のご協力も得て、盛り上がりを見せました。

(3) 協力を呼びかけた各公益団体の殆どが好意的に協力して下さいました。それぞれの役員会、支部長会、総会等において、この特別活動キャンペーンの資料配布、機関紙での紹介記事掲載、傘下組織あての協力依頼文書の発出など、全国加盟組織への働きかけを行って下さり、各地のアイバンク主催の啓発行事への参加や協力を依頼することができました。また、地域の団体（東京都薬剤師会や各地ライオンズクラブなど）が独自に啓発資料配布や募金等の協力活動を行って下さる例もありました。

ただし、これで各地におけるアイバンクと各種公益団体との協力関係がこれで確立したとは、到底いえない状態で、今回の全国キャンペーンをきっかけにして、各アイバンクが常時の協力関係形成に努力されることを期待します。

(4) この特別活動開始時の基準となった平成17年度のわが国の献眼状況統計及びそれ以降の年度の献眼等の実績は次の表のとおりです。

年度	新規登録者 人	献眼者 人	移植眼 件	待機患者 人
17	17,782	917	1,404	3,924
18	15,659	967	1,507	3,448
19	16,007	995	1,542	3,011
20	17,408	1,010	1,634	2,769
21	17,500	961	1,636	2,604

この表から見ると、「新規登録者」数については、18年度までに大幅減少傾向にあったものが、キャンペーン開始の19年度から次第に増加に転じてきたことが認められます。

「献眼者」数及び「移植眼」件数ともこの期間に概ね増加傾向を示しましたが、21年度に献眼者数が18年度のレベルに減少しました。各年度において新規登録者数は増加していても、これと当該年度の献眼者数の増加とは因果関係があるとは必ずしも言えませんが、長期で見れば献眼者数の増をもたらすものであります。また、既登録者及びその家族等に対してもキャンペーンの働きかけの効果が及ぼされた可能性があるのではないのでしょうか。今後の継続的な献眼の広報啓発活動が必要であります。

待機患者数については、角膜移植を要する患者の発生状況に大きな変化がないとすれば、「待機患者」数に影響する要素としては、国内の献眼者数の増加のほかに、輸入角膜数の動向があります。当協会の調査では、近年は輸入角膜数はほぼ横ばい傾向であることから、国内献眼数の増加がかなり待機患者数の減少に寄与したと言えられると思われまます。

以上、この3年間の愛の献眼50周年・献眼推進特別活動のキャンペーンは、関係各方面の暖かいご協力により成果を挙げ得たことを、深く感謝する次第であります。それでもなお、当初の目標として掲げた、待機患者推定 約5,000人を平成22年度末 約2,500人に半減させることが実現するかどうか、また、その後フォローアップ活動を続けて、同 25年度末原則ゼロ人に近づけられるかは、必ずしも確かな見通しがない状況です。今後のフォローアップ活動がきわめて重要となるところであります。

5、特別活動のフォローアップ

以上の愛の献眼50年献眼推進特別活動を受けて、日本アイバンク協会としては、平成22年度より、献眼推進啓発活動をさらに展開することとし、「献眼登録フォローアップ事業」を実施する方針です。

現在各アイバンクに全国累計140万人を超える献眼登録が行われているのに対して、実際に毎年の献眼者数は1000人程度に留まっている実態があります。（21年全国死亡率 人口1千対9.1を考えると、140万人のうち年間死亡者数は、1万2千人以上になる割合です。）

献眼登録者が死亡されたとき、実際に献眼を実現させるためには、登録者本人のみならずその家族に対する啓発が重要なことはいまでもありません。献眼登録の増加を図るとともに献眼登録者の意思を確実に献眼に結びつけるための体制作りのため、全国各地のアイバンク中からモデルを選定して、その活動を助成する計画を準備中です。

以 上